
大切な物ができて・・・

雲天道風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切な物ができて・・・

【Nコード】

N1620BA

【作者名】

雲天道風

【あらすじ】

家族を殺され、親友を誘拐された主人公は、心を閉ざした。そんな主人公はある日。本屋で強盗に誘拐されてしまう。だが、誘拐犯はとても気弱な男で、そんな男の優しさに主人公は・・・

1話

全ての出会いはあのときから始まった。

『おい！この女を殺されなくなかったら100万今すぐ用意しやがれ！』

人の悲鳴が聞こえる。

赤い液体が流れている・・・
これは、人の血だ。

人の血を見るのは嫌いだ。
人殺しはもつと嫌いだ。

ここは何処だろうか。自分はどこしてこんな所にいるのだろうか？

『目が覚めたか』
『ん・・・』

手を動かそうとしたが動かなかった。
上で何かで繋がれている。

何だか寒い・・・

ああ、服を身につけていないから・・・

何も混乱なんてしなかった。

どうでもいいのだから・・・

『男に下着姿を見られて何も思わないのか？』

『はい』

『思春期の中高生ぐらいだろうが』

男は自分が恥ずかしくなったらしく、服を投げつけてくると、鎖を外してくれた。

『怖くねえのか』

『いえ、何がですか？』

怖いことなんて何もない。

しいて言えば人と話してること・・・だろうか。
怖いとは言わないが、落ち着くものでもない。

『お前覚えてねえのか？さっきのこと』

『覚えてますよ。しっかり・・・血が流れてました。人殺しはダメです。人の命と言うのは失って初めて大切だと気づくものなのです。貴方はそれをわかって、命を奪ったのですか？』

『別に俺だって・・・好きで殺したわけじゃねえ。仕方、なかったんだ・・・』

男は何処か思いつめた顔立ちをしていた。
さっきのことを悔いているようにも見えた。

『何かわけでもあつたのですか？それでも人を殺す理由にはなりません。』

『わかつてるさ・・・俺にはどうしても100万が必要なんだ・・・俺の御袋がもう長くねえんだ。手術すればあるいは助かるかもしれないって・・・』

でもその手術費が、100万するんだ・・・』

『そのために強盗に入ったと・・・』

『ああ、今まで迷惑ばっかかけたからな。親孝行しようと思ってな・・・』

考えの間違った解答だ。

そんなことでお母さんが喜ぶわけもないのに・・・

マダ生きているんだから、他に何かしようとは思わないのか？

助けるのに他に道はないのか？

目の前にあるものにすがりたい気持ちはわかる。

手っ取り早い助け方だと悟ったのだろう。

でもこれでは・・・

『それでお母さんが喜ぶとも思ったのですか？もしも貴方が犯罪で得たお金だということをお母さんが知ったら・・・

お母さんはきつと悔いると思います。自分のために息子がそんなことをしてかした。と・・・』

貴方はお母さんの気持ちを考えなかったのですか？』

『うるせえ！お前に俺の何がわかんた！親が死んじゃうんだぞ・・・』

お前にその気持ちがわかるのか！」

『どうでしょうね・・・もういないから・・・』

『いねえって・・・どうということだ？』

男の顔立ちが変わった。

怒りに狂うような顔が、一気に同情の目に変わった。

『家族は誰もいないんです。皆殺されました・・・』

『殺された？お前は無事だったのか？』

『はい・・・あれは、自分の誕生日の日でした。お母さんはりきってケーキを作るって、お父さんは今日は早く帰るって、弟はプレゼントをくれるって・・・』

皆はりきってました。とつても嬉しかったんです。ときどきしながら扉を開けました。皆どんなことをしてくれてるんだろ。って・・・

でも、扉をあけたとき・・・異様な臭いが鼻を突きました。

キッチンにいくと、お父さんがお母さんを庇った形になって真っ赤に染まってました。その下にはホワイトケーキが赤く染まってました。

弟は自分の部屋で倒れていました。赤く滲んだ床の上にプレゼントがありました・・・』

思い出さなくなかった・・・

でも、いつも胸にはこのことがあったのかもしれない。意外と話すことに辛さを感じなかった。

『すまねえ。お前も大変な思いをしてきたんだ・・・』

この人は悪い人じゃない。

何となくそう思った。

きつとお母さんがとっても好きで、本当にお母さんのために仕方なく・・・

きつと人を殺したことを一生悔いと思う。

『いいんです』

小腹が空いた気がしてかばんの中からグミを取り出した。

『そついえばお前腹減ってんじゃねえのか？』

『これがあるから大丈夫です』

『そんなんじゃすまねえだろ？』

『ずつとこうですから・・・』

家族が死んでから、いつからかはわからないけどずっとまともなご飯を食べていない。

お腹が空いた気分になっても、こういう物を口にすればすぐにその感覚は収まる。

『育ち盛りがそんなのじゃダメだって！』

『気にしないでください。人質のご飯のことなんて気にするんですか？』

『いや・・・』

男は苦虫を潰したような表情をした。
とっても優しい人だ。

世の中こんな人ばかりだったらいいのに・・・

『お前学校行ってるだろ？学校で昼飯とか食うだろ？』

『いえ、昼休みはいつも図書室で本を読んでいます。誰も自分がいないことには気づきませんから』

『お前あの時も難しそうな本読んでたよな・・・つうかお前、友達とかいねえのか？』

『いましたよ』

過去形な表現。

今もいる。けど・・・

『いました。ってどういうことだ？そいつももしかして・・・』

『いえ、死んではいません。死んでないと思います・・・』

『どういうことだ？』

『今の自分の状態がずっと続いているんです。2年ほど前から・・・』

男はそのことを聞くと、更に悲しそうな顔を見せた。

同情の目・・・そういう風にも見えるが、この人は何処が違う。まるで自分のことのように思っている。

何故かそんな風に感じた。

『じゃあ今は一人なのか？』

『はい』

自分は何も感じずにそう告げたのに、男はそれを聞いた瞬間何処か罰の悪そうな顔をしていた。

『お前すげえ苦労してんじゃねえか・・・』

『別になんてことはないです』

そう言っただけの中から一冊の本を抜き取った。
男を気にかけずに本に目を通した・・・

『お前って小説が好きなんだな。俺そういう文章だらけの本って見ただけで頭が痛くなるんだけどよ。どの辺がおもしろえんだ？』

『小説とはその人の作り出した物語です。その人の作り出した物語はつまりその人の世界なんです。自分は他人の世界を見るのが好きなんです。』

人それぞれ個性があって、楽しいものなんです』

『世界。か・・・何か難しいな。ていうかそんな感想初めて聞いたぜ。お前頭いいな』

『そうですね・・・学校の中ではいいほうですが・・・』

『ちなみに学年何位だ？』

『知りません。そういうのには興味ないんです。ですがテストではいつも100点ですね』

それを告げると男は驚いた顔をした。

今の部分に驚く点なんてあったのだろうか？

学校のテストなどレベルの低いもの。

範囲は全部教えてくれるのだから100点を取れない人の気がしれない。

『お前さ。本好きだろ。もしかして小説家なんて目指してるのか？』

小説家・・・

『いえ、さっきも言ったように小説とはその人の世界を現しています。その人の世界とはその人の心情なんです。』

つまりその人の性格や、その人の思いが現れるわけなんです。今の

自分の世界はとても暗いものです。そんなものを誰が好きで読みますか？』

『難しいことはよくわからねえが・・・俺はお前が書いた小説読んでみてえぜ』

『すみません。お断りします。今の自分の世界を他人には見せたくないんです。今の自分の世界に誰も入ってきてほしくないんです』
『そう。か・・・』

男は納得したようだ。

結構物分りのいい人なんだな。

結構人間観察はしている分、世の中にどういう人がいるのかは知っている。

たいていはここでも屈しない人が多い。

そんなこと言うな。と無理に人の中に踏み込んでくる人もいる。

ああいう人を見るとなんて失礼で、礼儀知らずな奴だ。って思う・・・

・

『なあ、腹・・・減るだろ。俺が作ってやろうか？』

『いいんです。もう普通のご飯なんて食べられませんから・・・』

『何でだ？お前だって料理作れるだろ？』

『お母さんはとっても美味しい料理を作ってくれました。昔は現役で・・・』

『すげえじゃねえか』

お母さんの料理はとても美味しかった。

何処のお店の料理よりも、お母さんの料理が一番美味しかった。

お母さんから料理は教えてもらっていたし、自分もそれなりに料理

は作れた。

『それなら作れるだろ?』

『作れますよ。でも、もう自分のために料理を作るのは・・・』

『なら、俺のために作れよ』

『別に、かまいませんが・・・貴方は本当に面白い人です。とつても優しくて・・・』

何だかこの人には温かみがある。

人を殺した人をそんな風に思うのは間違っているかもしれないけど、それでもこの人は優しい人だっと思った。

何だかこの人には料理を作ってあげてもいい。そう思った。

冷蔵庫を開けたらあるものがそろっていた。

『あ』

『どうした?』

『いえ・・・』

ケチャップに卵にチキン・・・

そして温かなご飯・・・

これだけ揃っていれば、出来るのはあれだ。懐かしいあれ・・・

『見たい、ですか・・・?』

『何を?』

『自分の書いた小説・・・』

『あるのか？』

『昔のなら・・・』

マダ昔。

皆が生きているとき、家族で笑っているとき、親友と笑っているとき。

自分は明るい小説を書いていた。

あの時の自分の世界はどれほど明るかったか。

その頃の気持ちを忘れないために、その時の気持ちを忘れたくなくて、自分は今でもそれを持ち歩いている。

絶対に、決して忘れないために・・・

『マダ家族の死ぬ前のおかげですから、自分の世界はとても明るいんです』

『そういうことか・・・』

そうして自分は男に小説を見せた。

その間自分は懐かしい料理を作り始めた。

『うわ。すげえ・・・お前すげえ文才あるじゃねえか！』

『ありがとうございます・・・』

『俺今まで小説なんて読もうと思ったことすらねえけどよ・・・お前のは何つつか、お前の世界？に引き込まれるんだよ』

『そうですか・・・』

素直に喜ぶことなのか・・・

今の自分が書いたものじゃないことから、喜んでいいのかわから

ない。

『出来ましたよ』

そのうちに料理を作り終えた。

『どうぞ』

『オムライスか。すげえ、むちゃうまそうじゃねえか』

『お母さんのオムライスはとても美味しかったですよ。自分がいくら真似をしようとしても真似できなかったものなんです』

『へえ・・・』

男は話しにはあまり関心がなさそうに、オムライスをじつと睨んでいる。

『じゃあ・・・』

そういつて男はスプーンを口に運んだ。

『うめえじゃねえか！お前の分も作っただろ？食べよ』

『自分はいいです・・・貴方だけ食べてください』

『そんなこと言っな。ゆっくり食べよ』

『はい・・・』

一口オムライスを口に含んだ。

とろけるような味・・・

懐かしい。

だけど昔のように美味しい。という感情が出てこない。

『もういいのか？』
『はい』

自分はオムライスを端におくと本を開け始めた。

『そういえばよ。名前なんていうんだ？』

『忘れました。名前というのは人に呼ばれて初めて意味をなすものなんです。』

もう2年も人から名前を呼ばれたことはありません。なので忘れてしまいました』

『忘れたって・・・いくら誰にも呼ばれてねえからって、名前なんて忘れるもんじゃねえだろ？』

男は心底不思議な顔をしている。

この人はその意味を何もわかっていない。

『貴方の名前は？』

『俺は・・・司郎、西東司郎だ』

『そうですか・・・』

どうして名前なんて聞いたのだろうか？

名前ももう2年も呼んでいないのに・・・
というよりも、人と話したのは2年ぶり。

2年ぶりなのに、何だか久しぶりな気がしない。

元々人と話すのは苦手なのに、何でかこの人にはすらすらと話しが出来る。

この人はとても不思議な人だ・・・

『後、ずっと言おうと思っていたんですけど、ここは貴方の家です

よね？こんな所にいていいんですか？』

『どういうことだ？』

『貴方は何もわかっていないようですね。あれだけのことをやったんです。指名手配になってないわけがないです。今なら警察だって動いてるはずですよ。』

家には一番最初に来るはずですよ』

『あつ、そうか・・・俺馬鹿だ！どうすりゃいいんだ・・・』

男は何の知恵もなく犯行を行ったらしい・・・

普通これくらいなら一般常識だろうに、普通自分の家に人を監禁したりしないだろう。

あそこまで目立つことをやった後なら絶対にだ。

『自分の家に来ますか？あの家はマダ残っています。現場も何事もなかったように綺麗なので心配をすることありません』

『そう。だな・・・』

2話

そして共に自分の家に訪れた。

実は家族が死んでから4年。この家には入っていない。

最初の何ヶ月かはここにいたが、皆がいたはずの場所に誰もいないのはとても寂しく、一人でいるのはさすがにきつかった。

2年間は親友の家に泊めさせてもらっていた。

だが親友がいなくなっただけからは、住む場所はなかった。

ただ公園など、色々なところをブラブラしていた。

休憩は学校でも出来るし、休日は図書館などに寄っていた。

『お前、ここに入る気になるのか？』

『4年ぶりですね』

だけど家の中は何も変わっていなかった。
当たり前だ。

もちろん事件があったこともわからないようになっていた。
金がかかったが、綺麗に掃除してもらった。

『ひれえ家だな』

『ここが自分の部屋です。電気はつけないほうがいいですよ。4年も電気がついていなかった場所に急に電気がつけば怪しまれますから、

いくら自分の身元はわかっていないとしても、もしもという場合がありますから』

『何でお前そんなに犯罪の知識あるんだよ』

『たくさん本を読んでいますから、世間のことはよくわかります。犯人の気持ちなども、人の行動なども・・・』

『何かすげえ』

そういつている男の顔は何処か自分のことを不気味がるような顔をしていた。

無理もないだろうけど・・・

それでも自分のようにたくさんの本を読んで、たくさんの人を観察していれば、誰でもこういうことはわかってくると思う・・・

『暗いのが苦手でしたらこちらの部屋にいらしてください』

そして男を連れて、来た部屋は、この家の中で唯一窓のない部屋だ。普通部屋には窓やバルコニーなどがあるが、ここは完璧に外から見えないところだ。

お父さんが面白いだろうと言って作らせた部屋だ。

この家はお父さんが建てた家だから構造は全てお父さんが決めたものだ。

『おもしれえ部屋だな』

『よく弟と遊んでました。ここにはほとんどのものが揃っていますよ。言えば緊急の部屋ですね』

そこにはパソコンや、テーブル、小さな冷蔵庫が置いてある。

自分はここには弟と遊ぶときにしか来たことがないが、お父さんが仕事をするのにこの部屋を利用していたのを覚えている。

自分の部屋があるというのに、何故だかここが落ち着くらしい。

『それでは、この部屋でゆっくりくつろいでください』

『待て』

『はい？』

部屋を去ろうとすると、何故か手を捕まれた。

『あんな暗い部屋に、一人でいるのは寂しいだろ』

『暗いところには慣れてますよ』

『そういう意味じゃ・・・』

『お前もここにいろよ』

これは人間のする余計なお節介つていう奴だ。

こういうのをどうして人はしたがるのだろうか？

今の自分には感情が出てこない。

感情がわからないのではない。

でも、どうしてそんなことをするのかは理解できない・・・

『わかりました。ではどうぞ休んでください。布団とお父さんの仕事を夜までしていたときのパジャマならここにありますが・・・』

『・・・サンキュー』

やはり人の私物を身に着けるのは多少気がひけたらしいが、今自分に着替えがないのは確かなのだから、着ることにしたらしい。

『お前、パジャマは？つつか・・・布団は？』

『パジャマは自分の部屋にあります、布団は家にはこれ一つしかありませんよ』

『な、何でだ？』

『自分の家は皆ベッドで寝てましたから・・・』

『そ、そうか・・・』

男は何だか困ったような顔をしていた。

布団が一つで十分じゃないか、自分は寝ないから・・・

『どうぞ。休んでください』

『お前は？』

『自分はもうずいぶん寝た記憶がないです。自分は寝なくても大丈夫です。だから貴方だけでも休んでください』

『ダメだ。お前も寝ろ！ほら、もうそのままでもいいから、こっちにこい・・・』

男は多少照れている風にも見えたが、それ以上に真剣な顔をしていた。

『自分は寝れないのですが・・・』

『いいから、この布団シングルじゃねえみてえだし、問題・・・ねえだろ』

『それでは』

自分は眠らないが、この人を眠らすためにはこの人から顔を逸らすしかないだろう。

その人のいる方向とは反対の方向を向いた。

こうしていれば寝たかどうかなんてわからない。

『こっちむけよ・・・寝れねえって、どういうことだ？』

『わかりません。でも目を閉じれないんです』

ずっと思っているが、どうしてこの人には本音を話せるのだろうか？何か言い訳をすればいいのに・・・眠れなかったのは過去の話しだった。今横になってみれば眠れそう。なんていったら、話しは終わったのに・・・

『怖いのか？』

『怖い？・・・そうかもしれない』

『何でだ？』

『知りません』

『じゃあ、いつからだ？』

『たぶん2年ほど・・・』

今までこんなこと考えたことがなかった。

自分が消えることが怖いのか？

それはないと思う。

自分はもう消えてしまってもいい。消えたいとも思っているのだから・・・

『もしかして、自分が寝たらそのまま起きられねえ。とか考えてるのか？』

『それはないです。もしそうなら自分は嬉しいと思います。何度も自分は死んでしまいたいと思いましたから』

『でも、実行に移さなかっただけいいじゃねえか』

『移しましたよ。失敗しましたが・・・自分の服を脱がせた時に気づかなかったのですか？』

男はその時のことを思い出したのか、少し赤くなっている。

『これにです』

自分はそう言っただけをめくった腕を見せた。
男はその腕を見た瞬間顔を青くした。

『お前……そんなことしてたのか』

腕には無数の切り傷がある。

もちろん自分でやったものだ。

これで死ぬるかと思ったけど、中々出来なかった。

半分は怖くて力をあまり入れられなかったからだろうが、これでは死ねないらしい……

『自分も早く皆のところに行きたかったです。どうして自分だけ生きているのか。どうして自分だけ……って、ずっと思ってたんです』

『そうか……。でもよ。お前の命は皆からの誕生日プレゼントなんじゃねえか？』

『えっ？』

『きつとそうだ。だからその命は大切にしろ』

『人質にしている人が、言う台詞ですか？』

男は忘れていた。とでも言っただような顔をしていた。
本当にこの人は犯罪にはむいていない人だ。

『なあ……。お前もしかして目つぶれないって、寂しいから……じゃねえのか？』

『寂しい……。？』

『わかんねえけど……。こっちこいよ』

何をしたいのかわけがわからなかった。
だけど自分は言われるままにした・・・

『・・・！』

突然体に暖かい感触・・・

抱きしめられているようだ・・・

『これで、安心だろ・・・？心配するな。お前は一人じゃねえ・・・』

『だから、貴方が言う台詞じゃないですよ・・・』

昔の感情が出てきた気がする。
安心。しているのだろうか？

昔のように暖かみがある。
家族がいたときのよう・・・

まるで今、家族がいるかのように、とても安心して・・・
本当にこの人は不思議だ。
自分はどうかしてしまったのだろうか？

そう思いながらも意識が遠のいていくのを感じた。

目が覚めたとき、隣にはマダ温かい感触があった。
寝たんだ。眠れたんだ。

この人の隣で・・・

マダ寝息を立てている彼を見ると、本当不思議で、何故か安心した。

『ん・・・あつ、す、すまない』
『はい・・・』

男は自分を見ると顔を赤らめながら遠のいていった。
昨日は結構積極的だったのに、この人はヘタレという部類・・・

犯罪に関しても、てことは・・・

『あの、もしかしてマダ凶器持っていたりするんですか？』
『え？』
『だから凶器ですよ。ナイフマダ持ってるんですか』

男はそれを聞くと思い出したかのように上着からそれを取り出した。

『指紋と血痕をふき取った方がいいですよ』
『ああ・・・』

男は曖昧な返事をしながらも、どうしたらいいのかわからないらしい。

『貸してください』
仕方なく自分がすることにした。

どうして自分が犯罪者に手を貸さなければいけないのか。
彼は人殺しだ・・・

すぐにも警察に通報すればいい・・・

そう思いながらも自分の手はナイフをふき取っていた。

『お前本当何でも凄いやな』

『貴方がダメなだけです。だいたいこういう人は凶器は捨てれず
にいたりするんです。』

ちよつとは勉強してから行うべきですよ』

自分はそう言つて吹き終わつたナイフをキッチンへと持っていこう
とした。

『待て。何処いくんだ？』

『キッチンです・・・』

『一人で大丈夫なのか？』

この人は何を言っているのだろうか。

『何が大丈夫で、何が大丈夫じゃないんですか』

『だってよ。家族が死んだ・・・』

男は言い出しにくそうにそう呟いた。

『だから何ですか。過去の話しです』

そう言つて自分はキッチンへと向つた。

キッチン・・・

足を踏み入れたのは、もう・・・

ここでお母さんがケーキを作って、きっとお父さんと楽しそうに誕生日のことを考えていたに違いない。

でもどうしてだろう。

どうしてまだ自分が帰っていないときに起こったのだろうか。

自分が帰ってきていて、誕生会の途中なら楽しい思い出と一緒に皆と逝けたのにな・・・

そう思いながらナイフを見つめた。

あの時皆もこれで刺されただろうか。

そっか。これで切ったら死ねるんだ。

ゆっくり、ゆっくりとそれを手首に近づける。
後もう少し・・・

何でだろう。少し前までは怖くなかったのに、何も考えずに切れたのに・・・

何故か少し怖い・・・

でも・・・

『っ・・・』

思いつきりナイフを手首に当てた。

血がどんどん流れていく。

やっと死ねるのかな？

意識が遠い。

頭が変な気分だ・・・

『おい』

倒れる前に彼の声が聞こえた気がした。

何で彼はここに来たんだろうか？

あたしは遠のく意識の中。

何故かそんなことを考えていた。

3話

目が覚めると、そこには白い天井。

これは、さっきの部屋・・・

『良かった』

隣から男の声が聞こえてきた。

『何で・・・』

自分は一瞬理解できなかった。

何があった？

『お前・・・ナイフなら死ぬるとか考えたのか？マジで死ぬかもしれねえだろ。何やってんだよ』

男は怒った様子だった。

何に怒っているのか。

自分が死のうが、何をしようが関係ないのに・・・

起き上がると、手首を見つめた。

不恰好に包帯が巻かれていた。

そこには赤い血が滲んで・・・

『やつ、血・・・』

何度もこんなことはやっていた。

昨日も流れる血を見ていた。

だけど、それに対して何の感情も抱かなかった。

だけど、今自分の中には確実に恐怖の感情がある。

『やだ・・・』

手首を見つめながら、様々な記憶が思い出された。

それは家族を失った時の記憶でも、家族と過ごしていた記憶でもなかった。

自分が一人になってしまった。

つまらない日々を過ごしている記憶だ。

『だから・・・お前は一回ぐらい泣けよ』

男は昨日の夜のように抱きしめてきた。

『何言って・・・』

言葉が出なかった。

本当に涙が出てきそうだった。

家族が死んだ時から涙は一度も流したことがなかった。

親友がいなくなった時も、涙は出てこなかった。

ああ、またか。

不謹慎にもそんなことしか思えなかった。

『みんな・・・何で』

何かを言いたかった。

だけど上手く言葉に出来なかった。

頬には冷たいものが何滴も流れてきた。

『ごめん。俺が・・・俺がお前みたいな奴を巻きこんじまった。俺は・・・でも、俺は自主するわけにもいかねえ。

今のお前にこんなことを話すのは不謹慎かもしれねえ。本当は何か他の言葉をかけたい。

でも、俺がそんな立場じゃねえよな』

男は笑いながら言った。

自分は何故か男の言葉に耳を傾けた。

抱きしめられていることに安心を感じた。

どうして・・・

人間は嫌いだ。

だけど、この人は・・・

それからどれくらいが経っただろうか？

自分は何の疑問も感じず、ましてやいつまでもこのままでいたいと思いが、しばらくその状態が続いていた。

『落ち着いたか？さっきのことだけど・・・俺はここを出て行くこ

とにするよ。お前の助けは借りないことにした』

『疑問を一つ尋ねていいですか？』

『ああ』

男は驚いたように自分の顔を見た。

何に驚いたのかはわからない。

『手術を行うお母さんの元に……いえ、その病院にどのようなしてお金を運ぶのですか？』

自分がそう尋ねると、男は『しまった』とでも言うような顔をした。

『すでに事は大事になっているはずです。病室ではあまりテレビを見ないでしょうから、お母さんにはその話は

いっていないと思います。医者が言うとも思えませんか。でも、医者は知っていると思います。ニュースにもなっているでしょう。

貴方の身元はもう割れているはずですよ』

男は自分の言葉に頭を抱えた。

本当にこの人はどこまでノープランで事を起こしたんだ。

自分がいなければ、この人はもう捕まっていたに違いない。

『一つだけ方法がありますよ』

『何だ？』

男は嬉しそうに顔を上げた。

『自分が貴方の代わりに病院に行けばいいんです』

男はその言葉にさっきまでの笑顔を消した。

『それはできねえ。さっきも言っただろ。お前には迷惑かけられねえ』

『でも、貴方は自主するわけにはいかないんでしょう？ここで時効が来るまで暮らせばいいじゃないですか』

『そんなこと……』

男は戸惑ったように言った。

きつとそうしたい気持ちもあるに違いない。

『いや、俺はそんなことは出来ない。それに、仮にお前が病院に持って行ってみるよ。お前が誰かわからなかったら怪しまれるだろ』

『その辺はどうにでもなりますよ』

男は困った顔をした。

『お前は俺がここにいたことが迷惑だろ？』

『いきなり何を言ってるんですか。そもそも自分は貴方の人質のはずですが』

『もう、人質じゃねえよ・・・』

男は口ごもりながら言った。

『でも自分がいなければ貴方の考えは矛盾だらけです。貴方一人で病院にお金を届けることも、警察の手から逃れることも出来ません』
『いいきるなよ』

男は苦笑しながら言った。

自分はどうして・・・

どうしてここまでこの人のために？

人殺しは警察に突きつければいい。

どうして自分はこの人を助けようとしているのだろうか。

自分は考えたがわからなかった。

だけど、一つだけ少しわかることがある。

この人に一緒にいてほしい。ということだ・・・

『ともかく、手術は早めにしたほうがいいですから、あまり考える時間はありません。』

しかし、貴方がどうしても自分の手を借りたくないのでしたら、絶対に成功する方法を今から考えるべきです』

男はそう言われて焦った。

自分には手助けをしてほしくないが、何も考えていなかった。

恐らくそんなところだろう。

『今日一日待ちます。それでも貴方の意見が出てこなければ、自分は勝手に貴方のお金を持って病院に行きます』

『わかったよ・・・』

男は渋々と納得した。

何処の病院かも聞いていないのだから、自分が勝手に行くことなど

出来ないのだが、男は今はそんなところまで頭が回らなかったのだろっ。

自分は部屋から出ると、血で染まった包帯を外して、きちんと消毒をして包帯を巻きなおした。

傷を見ても、もう何も感じなかった。

リビングには、ナイフが地面に落ちたままだった。

今度はきちんと血をふき取った。

そしてナイフ全体を綺麗に洗い、食器棚に入れた。

調べられたところで、自分の血がついたんだから、何の証拠にもならない。

部屋に戻ると、男は壁に向かって頭を悩ませていた。

いくら考えてもこの人の頭では何も思いつかないだろう。

自分はそんなことを思いながら、本を読み始めた。

今は丁度推理小説を読んでいる。

小説の中の犯人は、こんな男とは違ってとても利口だ。

完全犯罪をいとも簡単に考えてしまう。

小説の話なので、どんな犯罪だろうが事件はいつも解決してしまう。

世の中も小説みたいだったらいいのに・・・

自分は考えたこともないようなことを考えた。

『無理だ！！！！』

男が叫んだ。

自分の体は自分が思った以上にビクリと反応した。

『ああ、すまない・・・いや、色々とすまないんだが・・・』

男は申し訳なさそうに言った。

『何も思いつかねえ』

『だから自分の考えでいこうと言ったじゃないですか』

男はそれでも、納得しない様子でいた。

『もしも、お前が病院に金を持っていったとして、そのことでお前も疑われたらどうする？共犯者とか・・・』

『そうになったら自分が自主しに行きますよ』

自分がそういうと、男は怒っているような、何かわからない表情をした。

自分が表情で感情がわからない何てことは初めてだ。

きつとこんな状況になったことも、こんな顔を見たこともなかったからかもしれない。

『そんなことはさせねえよ。俺は俺の親の手術が終わったら、捕まっただっていい。だからお前は何の罪もねえのに、犯罪者何かにしてたまるかよ』

『大丈夫ですよ。自分はそんなへましませんよ』

男は自分の言葉に悲しそうな表情をした。

『そういうことじゃねえよ・・・でも・・・本当にすまない。無事に成功したら、お前はこれからは明るい人生を送れよ』

その言葉に何かがひつかかるのを感じた。

自分の感情が揺れ動くのを感じた。

『どうかしたか？』

『えっ』

この瞬間に、自分のことも、男のことも何もわからなくなった。今まで客観的に何でも物事を見てきた自分なのに、全てが見えなくなった。

『この感情がわからないんです』

『感情？』

『自分が今思っていることがわからないんです。あなたの言葉に・・・』

男は不思議そうに自分の顔を見た。

自分は何を言っているのだろうか。

『どうということだ？』

『何でだろう・・・何だか悲しい気分になっているんです。どうし

てこんな感情になっているのか、訳がわからないんです』

『悲しい？それって、もしかして失敗してしまうからとか、そういうこと考えてるからじゃねえか？』

男の言葉が答えでないことは直感的にわかった。ただ、答えは何も出てこない。

『そうかもしれないですね』

答えが出ないまま、自分はそのことを放棄した。何故だか答えを知られたくない気がした。

こんな感情も初めてだ。

『やっぱり・・・お前がやるのはやめておけ』

男は心配そうに言った。

『大丈夫ですよ。いい策を考えますから』

『そうか』

男はマダ心配そうな顔をしていた。

4話

それから数日後のことだった。

すっかり夜も眠れるようになった自分は、朝何処か寒さを感じた。目を覚ましてみると、男の姿が見当たらなかった。

ひょっとして何処かに逃亡でもしてしまったのだろうか？

自分は男が捕まってしまう恐怖よりも、男がここからいなくなることに猛烈な恐怖を感じた。

『何処？何処？』

自分は子供が親を捜すかのように男を捜し始めた。

リビングに行ったが姿はない。

その時、階段から足音が聞こえた。

自分がとても安心してることに気がついた。

『起きたのか。勝手にすまないな』

『勝手に部屋から出ないでくださいよ』

『えっ』

男は驚いた顔をした。

『いや、すまん。家から出たわけじゃないんだから、それぐらい、いいだろ』

男は苦笑しながら言った。

『すみません』

自分は何を言っているのだろうか。

最近の自分は理解出来ない。

そのことにさえも、恐怖を感じた。

『今日までにお金を持っていけば、予定通りの日に手術が出来るんですね』

『ああ』

男は暗い調子で言った。

『やっぱり俺が行く』

『そんなことをしたら、成功するものも失敗してしまいます。事件から何日経ったと思ってるんですか？

あなたに対する警備は厳重になっっているでしょう。特に病気の母がいるとなれば、病院には警察が張り込んでるに決まっています』

男は、自分の言葉を聞くと頂垂れた。

最悪の事態を想像したのだろう。

『自分が行くので心配しないでください。自分の役回りはきちんと考えていますので、心配しないでください。

自分は絶対に捕まりません』

どちらが犯人なのかわからないような台詞を吐いて、自分は人通りのないことを確認しながら、外へ出た。

もう何年もこの家には帰っていない。

そんな自分がいきなりこの家から出て来れば、目立ってしまう。

こんなところで気づかれては、もともともない。

自分は少しだけ変装をしていた。

マスクをつけ、伊達眼鏡に、ニット帽を被った。

大通りに出れば、タクシーを拾えるだろう。

そこまでの道で誰とも出会わなかったからか、自分の警戒は緩んでいた。

やつと大通りに行くと、スーツを着た男が近づいてきた。

『失礼ですけど、お名前を聞かせていただけませんか』

『あなた誰ですか』

うかつだった。

こんなところで失敗してはいけない。

慎重に言葉を選びながら、同時に策も考えた。

『これは失礼しました。私はこういうものでして、ある女の子の捜索をしているんですよ』

男は警察手帳を見せると、今度は手帳の中を確認しながら、丁寧に

言った。

『本屋での強盗事件は知っているかな？その時に人質として連れて行かれた子の容姿や、体格が、あまりにも君にぴったりだね』

『そうですか・・・私は事件のことを知らないんで、協力とかできることないんです。すみません』

私と言ったのは、何年ぶりだろうか。

『そうかい。実はね・・・人質の少女の身元も、マダ割れていないんだよ』

自分はその言葉に、思わず驚きそうになった。

ここで表情を変えれば、絶対に怪しまれる。

『大変ですね・・・』

早くこの男は離れてくれないだろうか。

『悪かったね。引き止めて』

『いえ』

やっと解放される。

自分が安堵すると・・・

『ところで、今から何処に行くのかな？』

男は更に質問をしてきた。

『友達のところですよ』

『そうかい。それじゃあ気をつけてな』

男が離れると、タイミング良くタクシーが来た。

安心したようにタクシーに乗り込んだ。

病院に行く前からこんなことでは、先が思いやられる。

タクシーに乗りながら、あらゆる事態に備えての策を考えた。

タクシーを乗ってしばらくのうちに、嫌な予感がした。

後ろを振り返ると、数十分前に見たものと、同じ黒い車が後ろにいた。

もしかして・・・

自分は少し焦りながら考えた。
今ならマダ道の変更は出来る。

適当な繁華街に行つて、ゲーセンにでも入れれば、怪しまれることもないだろう。

自分が後ろを振り返つたのは、一つ目の信号のときと、今だけだ。
車の存在に気づいたとは、相手も思わないはず・・・

それから数分してから、運転手に行き先変更を告げた。

病院まではこの道からでは真つ直ぐ行けば到着する。

ここで曲がつて、後ろの車はどういう対応をするのだろうか。

あまり後ろを見すぎては怪しまれると思い、自然にサイドミラーを確認した。

黒い車は着いては来なかった。

病院で待ち伏せでもするのかと思つたが、意外なことに黒い車はＵターンした。

自分の思い過ごしだったのだろうか。

そこからあえてぐねぐねした道を通つて、無事に病院に到着するこ
とが出来た。

病院の前には警察はいなさそうだ。

警戒のレベルを上げながら、ゆっくりと受付まで向かう。

マスクをしていることをいいことに、自分は受付の人に近づいて、ぼ
そぼそと話した。

『西東陽子さんの手術費用を持つてきました』

受付の人は表情一つ変えずに、『お名前を確認させていただきます
ね』と言った。

病院には話しを通してないのだろうか。

自分は適当な偽名を言つた。

『西東さんとはどういった関係でしょうか？』

相変わらず表情を変えずに尋ねてくる。

『昔近所に住んで、お世話になつたんです』

『そうですか。それでは現金は主治医の方に直接渡してください。今は現金払いは少ないんで、安全の為に』

看護婦はそう付け加えると、主治医のいる部屋に案内した。

『正直困ってたんだよ。手術なしに助けることは難しいからね。こんな天使が来てくれて、きつと西東さんも喜んでるよ』

病院とは、こんなにも暖かい場所だっただろうか。

主治医に現金を渡すと、自分は足早に部屋を出た。

受付の看護婦が、自分に微笑みかけてくれた。

少し胸が痛むのを感じた。

何に対して胸が痛いのだろうか。

犯罪者に手をかしていることだろうか。

それとも・・・

ここまで来れば捕まったってかまわない。

自分は半分そう思い、半分は捕まりたくないと思っていた。

今の日常がいつまでも続けばいいのに・・・

タクシーに乗りながら、自分は何故だか男との出会いを振り返った。この世に運命が本当にあるのなら、自分と彼が出会ったのは運命なのだろうか。

男は自分に色々なものを与えてくれたように思う。

それが何なのか、はつきりとはわからない。

タクシーから降りると、自分は何故か、一抹の不安を感じた。

誰かに会うこともおかまいなしに、自分は家まで全速力で走った。

こういう時の不安は、どうして当たってしまうのだろうか。

二度目の光景・・・

家の前には数台のパトカーが止まっていて、大勢の野次馬がいた。この家は呪われている。

そんなバカみたいなことを考えた。

男はどうしているのだろうか。

自分は迷いもなく野次馬の中を突っ込んで、とうとう先頭に立った。あと少しでロープが超えられる。

だが、必死に警官の手が自分をロープの中には入れてくれない。

『ここは私の家です。入れさせてください。あの人は、あの人はどうなったんですか』

冷静ではいられなかった。

自分が何を言っているのかも、わかっていない。

『お願いします。入れてください』

後ろからスーツを着た男が近づいてきた。

『やっぱり君だったんだね』

さっきの警官だ。

『少しだけ君に時間をあげるよ』

男はそういうと、ロープの中に自分を引っ張った。

自分はその行動の驚きよりも、中に入れたことが嬉しかった。

扉の前まで向かった。

そこには鍵がかけられていたが、自分はここの住人だ。

迷うことなく鍵を開けると、中でまた鍵を閉める。

自分は真っ先にあの部屋へ向かった。

男が部屋の隅でうずくまっていた。

『すみません。自分が甘かったです。すでに厳重な警備だったんです。すみません』

男は顔を上げようとはしなかった。

さっきまでこの人は自分を心配してくれていた。

さっきまでぬくもりを与えてくれた。

なのに、自分は・・・

『本当にすみません』

何も言う言葉がみつからなかった。

『いいんだ』

男が呟いた。

『いつかはこうなる運命だったんだ。いや、お前がいなきゃ俺はとつくに捕まってたよ。金は運んでくれたんだろ。』

あの金で手術が出来るのかは、わからねえが・・・お前には感謝してる。謝るのは俺の方だ。巻き込んですまなかったな。

お前は俺に脅されて金を運んだって言えよ。お前が罪を被る必要はないからな』

男は顔を上げて、優しくそう言った。

何故だか涙が溢れてきた。

『いやだ。嫌だよ・・・どこにも行かないで、ずっと一緒にいてよ。自分が何故こんなことを言っているのかわからない。』

『お前・・・』

『私を一人にしないでよ。もう一人は嫌だよ。何で、何で皆どっかいつちやうの？どうして私は一人なの？』

今まで無意識に押さえ込んでいた感情が、溢れて止まらなかった。

『お前・・・やっぱり一人は嫌だよな。でも、俺にはどうすることもできねえよ』

『一緒にいてよ。捕まらないで』

この状況でそんなことが無理なことはわかってる。

『俺何かと一緒にいたって、仕方ねえだろ』

『そんなことないよ。家族と一緒にいたときみたいに、すごく楽しかった。あなたの優しさ嬉しかったよ。あのね・・・』

私の名前ね。川杉レイっていうんだよ。司郎さん』

『そうか』

司郎さんは、優しく微笑んでくれるだけだった。

『お前には、これからいい仲間が出来るさ。きつと明るくて笑顔の絶えない可愛い子だったんだろうなあ』

司郎さんはそいうと立ち上がった。

ダメ。

行かないで・・・

でも、もう止められない。

私は同じように立つと、司郎さんをじつと見つめた。

『いつか俺が・・・罪を償って出てきたら、この家に来てもいいか』
涙が流れるばかりで、私はその言葉に答えられなかった。

『そんなに泣くと、可愛い顔が台無しだ。本当に悪かったな』

司郎さんは、そう言って私を抱きしめた。

最初の日に感じたぬくもりとは違っていて、暖かいのに、私の心は冷たいままだった。

このままずっとこうしていられたら・・・

『そろそろ時間だ』

警察はそのまま男を連れて行った。

自分の心の中は、また氷のように冷たくなってしまった・・・

5話

事情聴取も済み、自分は結局何の罪にもならず、警察署から出て行く、またぶらぶらと歩き出した。

もうあの家には二度と戻れない。

また元の生活に戻ってしまう・・・

この数日間の出来事が、まるで夢のように思えてきた。

何もなかったんだ・・・

今までと同じ。

過去の出来事など、心の中から追い出してしまえばいい。

ふらふらと歩いた。

今自分が何処を歩いているのかも、自分が今歩いていることさえもわかっていないような・・・

自分の心が遠くに行ってしまったのを感じた。

『あら？あなたは』

後ろから声をかけられて振り返ると、小走りで看護婦が近づいてきた。

横を見ると、自分は病院の前まで来ていた。

『あなたのおかげで手術は大成功よ。西東さんも元気になられたわ。良かったら会っていかない？』

自分の足は、素直に病院の方に向かった。

過去のことにして、心の中に収めるつもりなのに、男の母親に会ってどうする気なのだろうか。

『ここよ。西東さん。入りますね』

看護婦は明るい声で言った。

『それじゃあ、帰るときに受付で声をかけてね』

『はい・・・』

自分は何故ここに来たのだろうか。

そう思いながら、部屋の中へ入った。

『あなたね。ありがとうね』

優しいそんな母親だった。

『いえ・・・』

自分は今、意図的に感情を押し殺している。

『司郎のお友達？あら、それとも彼女かしら』

母親は嬉しそうに言った。

自分の感情が、また溢れてきそうだと。

『ただの知人です・・・』

『そうなの。あなたは優しい子ね。どうか、司郎と仲良くしてあげてくださいね』

母親は笑顔で言った。

事件のことは何も聞いていないのだろうか。

『あの・・・』

自分は何をしようとしているのか。

母親は不思議そうに自分の顔を見た。

『いえ・・・司郎さんは、とても優しい人ですね。あなたに似て・・・よっぽど良い家庭で育ったって、よくわかります』

自分は何を言っているのだろうか。

もう、何も興味を示してはいけないのに・・・

『嬉しいわ。あなたの家族も優しい人たちなんだろうね。あなたを見てるとわかるわ。とても優しくて、可愛い子だわ』

『優しい人ですよ。それじゃあ、また・・・司郎さんと来ますね』

自分は何を求めているのか。

他人に気を使うことも、何年ぶりなのだろうか。

いや、こんな気何が使ったことはない。

受付に向かうと、看護婦が笑顔でこちらに来た。

『少し外に出ましようか』

『はい・・・』

何か理由があるのだろう。

きつと手術費用のことに違いない。

『あなたは どうして、西東さんに優しくするの？あの人には会ったことないんですよ』

看護婦の問いかけは、自分の想像とは違った。

『優しくしたつもりはありません』

『なら・・・どうして病院までお金を運んできたの？』

『それは・・・』

あの男と一緒にいたかったから・・・

『人間はね。一人じゃ生きていけないのよ』

『えっ』

『一人で暮らせてきたつもりでも、その間は何も楽しくなかったでしょ。人間は、人間と触れ合って、初めて楽しい人生を送れるのよ。あなたもそれを見つけたんでしょ』

この看護婦が、自分の何を、どこまで知っているのかはわからないが、何もかも見透かされている気がした。

『だけど、また一人になりました。私は結局一人なんです・・・一人で生きていかなければならない人間なんですよ』

自分は苦笑混じりに言った。

『あなたには仲間が出来るわ。素敵な仲間が・・・あなたが他人と関わらないようにしていたって、きつとまた西東さんのような人が現れるわ』

看護婦の言葉には、信憑性が感じられた。

近い未来にそんなことが起こるのかもしれない。

だけど、自分の心には、司郎さんと一緒にいたいという気持ちがあった。

彼にどんな思いを抱いて、自分はあの人に執着したのかはわからない。

ただ一人が寂しかったただけなのかもしれない。

『あなたは自分にとって、特別な存在の人しか一緒にいたいとは思わないと思うわ。あなたの心を奮わせるような、あなたの心を温めてくれるような、きつとそんな人しかあなたは求めていないわ』
まるで心の中を読まれたかのようにだ。
看護婦の言葉は本当なのかもしれない。
自分は何故かそう思った。

あれから数ヶ月が経って、私は高校生になった。
自分が今までいた場所は、自分が今まで他人を避けていたのは……

私には友達が出来た。

あの惨劇が起こる前と同じように、あたしは友達と笑顔で言葉を交わせるようになった。

こんなこと、もう二度と出来ないと思っていた。
自分はこれからずっと、一人ぼっちなんだって思っていた。
でも、それは違っていた。

『レイ、おはよう。昨日さ彼と出かけたんだけどね』

『相変わらず仲良いね。羨ましいなあ』

『何言ってるのよ。レイにもいるんでしょ？約束してる人が』

『そう、だね』

あたしが高校に行く気になったのも、あたしが他人と笑って話せているのも、全部あなたのおかげです。

今は生きていることが楽しいって感じられます。

今日を過ごすのも、明日が来るのも楽しみで仕方がありません。

あなたは私に素敵なものをいくつも与えてくれました。

何も出来なかった私だけど、あなたが戻ってきたら、私はきっと素敵なお返しをします。

あたしは今も、いや、今は、そしてこれからも家族と共に過ごした家で暮らそうと思っている。

いつか、彼が帰って来たら、あたしが笑って出迎えてあげられるように・・・

心配してくれていた彼に、もう何も心配することはないと、友達と共に安心させてあげられるように・・・

6話

彼が出所してくるのは今日だ。

私はもうすぐ高校を卒業するころだ。

殺人及び強盗は普通最低でも10年は入っていなければならない。

それが何故、こんなにも早いのかは私にはわからない。

それに、何故か私の家のポストに彼が出所するというはがきが入っていて、差出人も不明で、少し奇妙だった。

それでも私は、そんなことよりも彼が出てくるといふ真実が嬉しかった。

今日は丁度日曜日で、学校も休みだ。

私はいつかのオムライスを作りながら、彼が来るのを待っていた。

彼はここに帰ってきてくれると言った。

夕方になっても、誰も訪ねて来なかった。

あのはがきが嘘なのか、それとも彼が忘れているのか。

後者の方は考えたくなかった。

彼にとつての私は、ただの逃亡生活の逃げ道だったなんて考えたくもない。

私が彼に認められていないと思うと、私の今までの生活が無駄なものに思えてきた。

涙が浮かんできて、私の心はまた冷たくなってきた。

そんな時だった。

私の心を奮わせる音が聞こえてきた。

ピンポン

『司郎さん!』

急いで扉を開けると、そこには少し顔つきが変わった司郎さんの姿があった。

『司郎さん・・・』

『もしかして、あれからここに住んでるのか?』

司郎さんは少し驚いたような、しかし笑顔で尋ねてきた。

『はい、私・・・ずっと司郎さんのことを待っていたんです。私高校に入りました。今は3年です。友達もいっぱい出来たんですよ。見てください』

私は嬉しそうに、この前友達と撮ったプリクラを司郎さんに見せた。
『そうか。レイちゃんが明るくなってくれて良かった。君は笑っている顔の方が可愛いよ』

『えっ、ありがとうございます』

少しだけ照れくさくなった。

ずっと司郎さんに会いたかった。

司郎さんと笑って話したかった。

何も考えずに、ただ純粹に・・・

『司郎さん。中に入ってください。私、司郎さんに食べてもらいたくて、またオムライス作ったんです』

『そうか』

司郎さんが少しだけ大人びて見えた。

『これ・・・前よりうまくってないか?』

『わかってくれましたか?』

一口食べるなり、司郎さんは私が言いたかったことを言ってしまった。

そう、だって今は・・・

『やっとお母さんの味に辿り着くことが出来たんです』

『レイちゃんがこの家で、家族と向き合ってくれてよかった。それに、友達も作って毎日楽しく過ごしてるって聞いて安心したよ』
司郎さんはスプーンをおいてから、真剣な顔で言った。

『司郎さんにこの姿を見せたかったから・・・もう心配しなくていいって、私は毎日楽しく過ごしてるって、伝えたかったから』

『本当は・・・少し怖かったんだよ。もうこの家にはいないんじゃないかって、もう俺とは二度と会いたくないんじゃないかってな』
司郎さんは突然悲しそうな顔で言った。

確かに、最初は忘れようとした。

もう誰とも関わりたくないって思った。

けど・・・

『司郎さんが私に勇気を与えてくれたんです。そんな恩人に会いたくないわけ、ないじゃないですか』

司郎さんの目には涙が浮かべていた。

そして、それを隠すようにオムライスを流し込むように食べた。

やっぱりこの人は司郎さんなんだ。

『レイちゃん』

少ししてから、司郎さんはまた真剣な顔で私の名前を呼んだ。

いきなり真剣に呼ばれたので、少しだけ驚いた。

『実は今日さつきまでお袋に会いに行ってたんだ。それでここに来るのがこんな時間になってしまったんだけど、レイちゃんお袋に会ってくれたんだってな。』

お袋すげえ喜んでたよ。可愛いかの・・・いや、可愛い友達が出来たんだねって』

司郎さんは恥ずかしそうに言い直した。

私がお母さんに会いに行った時にも言われたが、今思うと恥ずかしい。

司郎さんに次いで、私まで顔が真っ赤になってしまった。

『あつ、いや、えっと・・・ありがとな』

『いえ・・・』

しばし気まずい沈黙が流れた。

『あ、の・・・』

『えっ、あっ、どっかいかねえか？あの時のお詫びっていうか、色々とレイちゃんには世話になったから』

司郎さんは我に返ったように言った。

『はい。勿論』

私の言いたいことは、また今度にしておこう・・・

私が昔親友とよく行っていたところを司郎さんに案内した。

親友との思い出がつまっていた、少し切なくなっていたけど、また新しい思い出に塗り替えられると思うと、嬉しくもあった。

『レイちゃんは本当に明るくて可愛い女の子だね』

司郎さんはいきなりそんなことを言った。

嬉しいけど、でも何かひっかかるものがある・・・

『あの・・・司郎さん。私のこと褒めてくれたり、お礼言ってくれたり、久々に会ったからって思っていました。でも・・・何だか司郎さん。可笑的いです』

私がそういうと、司郎さんは黙って歩きだした。

私は不思議に思いながらも彼を追いかけた。

司郎さんの背中が少しだけ寂しげに見えて、私は余計に何も言えなかった。

しばらくして、公園の中で司郎さんは足を止めた。

『レイちゃん』

振り返らずに、悲しそうに名前を呼んだ。

さっきとは違う意味で驚いた。

『司郎さん・・・』

私も呟くように相手の名を呼んだ。

『実は、俺ここにいたべき存在じゃないんだ』

『へっ？』

理解出来なかった。

『俺の出所日は今日じゃないんだ。はがき見てくれたんだよね』

『はい』

『あのはがきはね。ある人が書いてくれたんだ。それで、そのある人が俺を今日ここにいさせてくれたんだ』

『どういう、ことですか？』

あの奇妙なはがきには意味があつたってこと？

でも、出所日が今日じゃないってどういうこと？

あのはがきには、出所日が今日だって・・・

『俺が本当にこの場所にいられるのは、20年も先なんだ。だけど、その人が今レイちゃんに会うべきだ。そしてお袋にも会うべきだって言うて』

『20年も先？』

確かにおかしいと思っていた。

でも、誰が？

『今日ここに来てよかったよ。レイちゃんの素敵な姿が見られたし。お袋も元気だった。レイちゃんにはお礼言い尽くせないよ。俺のこを待つてくれたって聞いて・・・』

俺は・・・本当に俺はバカだ』

司郎さんは泣きながら言った。

私に会うために、司郎さんはここに来た。

20年もこの人とは会えない。

『司郎さん』

色んな思考が混じりあつて、私は司郎さんを抱きしめた。

『ありがとうございます。わざわざ私に会いに来てくれて・・・20年だって私はあなたのことを待ちます。待ち続けます』

司郎さんは顔を上げると、私の腕を放して少し距離をとった。

『レイちゃん。本当にありがとう』

一瞬何が起こったのかわからなかった。

目の前が真っ暗になって、唇に柔らかなものが触れた。

気づけば司郎さんは後ろを向いていた。

『あ、の・・・』

私が何かを言おうとした時に、パトカーが公園の前に止まった。

『ああ、もう時間か。もっとレイちゃんと一緒に過ごしたかった。

今日生まれて初めて撮った女の子とのプリクラは大切に持っておくよ』

『は、はい・・・』

『レイちゃん俺が出てきた時に、マダ君が待っていてくれるなら、さっきの・・・俺の行為に返事を・・・くれ』

最後の方司郎さんは顔を赤くしながら小声で呟くように言った。

あたしは、悲しさなどが混じっていて、その時に意味は理解できなかった。

『それじゃあね』

司郎さんがパトカーに乗ると、すぐに走り始めた。

『司郎さん。絶対に待ってますから、私待ってますから』

走りだしてから、私は叫ぶように言った。

涙は浮かべずに、笑顔さえ浮かべながら、彼に声は聞こえたのだろうか。

パトカーが見えなくなるまでじっとそこに続けた。

『レイちゃん』

『えっ？』

振り返ると、そこには看護婦の姿があった。

『もう行ったのね』

『えっ、もしかして・・・あなたが？』

遠くを見ていた看護婦は、私の方を向いて意味ありげに微笑んだ。

10年だろうと、20年だろうと私はあなたを待ち続ける。
いつか一緒に過ごせる日が来ると信じて・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1620ba/>

大切な物ができて・・・

2012年1月4日02時52分発行